

I. 実施概要

(ア)調査の目的

本調査は、内部質保証ならびに自己点検・評価の一環として、神戸女子短期大学(以下、本学とする)の現状・特徴を把握し、マーケティングやエンロールメント・マネジメントに活用することを目的とする。

(イ)調査対象

2024年10月1日現在、本学全学科(総合生活・食物栄養・幼児教育)に在籍する全学生198名を対象とした。

1年次生	30名
2年次生	45名
欠損値	2

(ウ)調査方法

一般財団法人 短期大学基準協会が実施している『短期大学生調査(Tandaiseichosa)』を用いた。本学においては、平成29年度から継続して同調査を行っている。

方式：WEB調査

時期：令和6年9月27日～11月29日

回収率：回答者数77名/在籍者数198名 38.9%

II. 結果・考察

【結果】

- 総合型選抜による入学者割合(32%)は昨年度より減少し(昨年度本学42%)、指定校推薦入試が増加した(44%)。
- 入学動機は重視している項目は昨年度とほぼ同様の傾向である。あまり重視していない項目については、設問内容の変更がなされたこともあるが、昨年度と異なる傾向が見られた。例えば経済的なサポートについては、昨年度40%から今年度56.8%と重視する者が増えている。高校の先生からのすすめが50%から42.5%に減少している一方、オープンキャンパスの印象が75%から87.8%に増加している。
 - 重視している項目(重視した+やや重視した)
 - ① 自分の興味があることや専門分野の内容が学べる(100%)
 - ② 就職するのに必要な免許・資格が取れる(94.6%)
 - ③ 学校施設やキャンパスの雰囲気(93.2%)
 - あまり重視していない項目(重視した+やや重視した)
 - ① 先輩や友人などからのすすめ(39.7%)
 - ② 高校の先生からのすすめ(42.5%)
 - ③ 短期大学の公式SNSの印象(45.9%)

- 授業内容の傾向
全国平均に比べて「先生が提出物に添削やコメントをする」「定期的な小テスト」「体験的な学習」の項目が高かった。その一方で、全国平均より低い結果となった項目は、「提文献や資料を集める」「オンラインで授業を受ける」「外国語を使う」「図書館を利用する」「これからのキャリアやライフデザイン、働き方について学ぶ」等であった。
- 学習時間：全国平均と比して、アルバイトに費やす時間が若干多くなっており、学修時間が減少傾向である。
- 教員や職員と関わる機会：全国平均と比して、授業や学習内容に関することを話す機会は若干多いが、ゼミに関連するプロジェクトへの参加機会が少ない傾向である。
- 活動や体験：令和3年度から比較し、地域貢献・ボランティア活動への参加度は令和3年度7%、令和4年度14%、令和5年度25%、令和6年度35%と年々増加しており、新型コロナウイルス感染症で低下していた学生の諸活動が回復したことが伺える。また、海外留学、サークルや部活なども、昨年度より微増している、
- 施設・サービス：全国平均と比して、サークルや部活動を除く全ての項目で同等以上の満足度である。特にトイレや化粧室への満足度が高い(本学92.9%、全体72.1%)
- 能力や知識：殆どの項目で向上したと実感しているが、外国語を使う力に関してのみ59.4%の学生が変化しておらず、17.3%の学生が減少したと感じている。
- 総合評価：他の学生(88.4%)・教員(94.2%)・事務職員(81.2%)との関係、キャンパスの居心地(87%)、まなび(学習)(89.9%)、総合評価(89.9%)全てにおいて、昨年度と比較して全体的に満足度が上がった。

【考察】

令和6年度の結果としては、昨年度とほぼ同等の傾向を示しながらも全体的に満足度が増加していた。

しかし、昨年度までカレッジアワーを利用してマークシート方式で調査を実施し、ほぼ100%の回答率を得ていたが、令和6年度よりWEB調査となり、回答率が半分以下に減少したことから、元々大学に対して肯定的である層が多く回答している可能性が高いことが一因と考えられる。一方でボランティア活動の参加率が上がるなど、課外活動が活性化し始め、学生生活の充実度が上がったことも要因の一つとして考えられる。

昨年度、一昨年度と比して、受講した授業で、プレゼンテーションをする(60%→66%→80.8%)、学生同士でディスカッションをする(88%→91%→94.5%)、フィールドワークなど体験的な学習(77%→85%→95.9%)などの能動的な学習が年々増加傾向にあり、令和4年度に105分授業が導入されてから授業の工夫がなされて続けていることが見て取れる。

また、昨年度と比して教員が提出物に添削やコメントをする(80%→93.2%)、定期的な小テストを受ける(87%→98.6%)など元々高い割合であったものについても更に上昇しており、能動的な学習のみならず知識の定着も深めながら教員が更に関わる授業が展開されていることが窺い知れる。